

# 葉石濤作品のなかの「日本」 —「獄中記」を中心に—

迫 田 博 子\*

「Japan」 in the works of Ye Shitao:  
Focusing on “Yuzhongji”

SAKOTA Hiroko

## Abstract

台湾作家葉石濤在於日治時代出生，接受日本教育而成長。光復後，歷經書寫文字從日語轉移到華語的變化，備受語言轉換之苦；因而被稱為「跨越語言作家」。文學創作語言的更易和認同變遷，即是這群作家們的印記。彭瑞金曾指出，葉石濤在其文學作品中把時代作為描寫的客體反映出殖民地經驗。本論將以葉石濤在於1966年發表的〈獄中記〉為例，檢視作家如何描繪「日本」，並歸納出文本中所顯現的日本意象。〈獄中記〉是描述一位台灣抗日青年的故事；字裡行間呈現了不少日治時代的浮光掠影。特別值得注意之處有二。其一是文中的日本地名和場所。本論將援用美籍華裔地理學家、段義孚（Yi-Fu Tuan）的「地方」理論，試以解析場景、人物與心情的互動並詮釋蘊含的示意作用。其二即是《萬葉集》。1895年台灣割讓給日本之後，台灣總督府的治台政策中，包括了以日本古典和歌（短歌）來推進皇民化教育培養日本精神。男主角聽到了一首和歌後深受感動；顯而易見他對日本古典文學擁有強烈的情感認知。台灣從五十年代開始瀰漫白色恐怖，六十年代亦是風聲鶴唳的時代。然而在政治時局的壓抑下，葉石濤為何卻在作品中闡述日本意象？背後是否有刻意隱喻的意旨或深層意涵呢？這是本文往後試圖欲進一步探討的重點。「沒有土地，哪有文學？」這句話代表葉石濤的文學史觀且是他念茲在茲的創作理念。或許透過此一敘述策略來追憶台灣的歷史，並期以伸展自我的文學理念。

關鍵詞：葉石濤、跨越語言作家、〈獄中記〉、場所、《萬葉集》

## 1. はじめに

葉石濤（1925～2008）及びその作品について考えるうえで、「日本」はひとつのキーワードとなりうるであろう。葉の経歴を特徴づけるものとして、台湾文学史上戦後第一世代作家だということがあげられる。すなわち日本統治期に日本語教育を受け、かつ日本語による創作を行っていたが、やがて敗戦とそれに伴う中華民国への復帰後、言語転換をしたのち、中国語作家として台湾文壇に再び登場した世代をさす<sup>1)</sup>。陳芳明は、「彼らが『言語を跨ぐ世代』と称されるのは、二つの残酷な時代の狭間にいたその苦境を暗喩しており、彼らが現実の困難を克服した苦勞を象徴している<sup>2)</sup>」との見解を提示している。二つの時代を生きてきた、というバックグラウンドを持っているためか、彭瑞金が指摘しているように、葉石濤は自身の被植民地体験を作品に投影する傾向がみられる<sup>3)</sup>。

本稿では「獄中記」<sup>4)</sup>をテキストとしてとりあげ、文中の日本表象について論じる。「獄中記」は1966年に発表され、初出は『幼獅文芸』である。日本にまつわるイメージを多用した作品であるが、管見の及ぶ限り、専門的な論述は極めて少ない。例えば、鄭清文は、「獄中記」の登場人物の一人である日本人検事について、「あたかも天使のような人物として描かれている。だが設定上、なぜ彼は日本人であって、中国人ではないのだろうか<sup>5)</sup>」

---

キーワード：葉石濤、言語を跨ぐ世代、「獄中記」、場所、『万葉集』

\*平成27年度生 比較社会文化学専攻

と述べている。また、彭瑞金は、「民族の対立を強調する一方、(支配者の)日本人と(被植民者である)台湾人の間にも友情を育む可能性がある<sup>6)</sup>」と指摘する。しかし、いずれも作中に散見する日本表象について触れられていない。そこで、作品に描出されている「日本」とは具体的にどのようなもので、また、それらをいかに解釈し、意味づけをすることができるのか。これらの問題を明らかにすべく検討する。

## 2. 葉石濤と「日本」

本論に入る前に、まず葉石濤の経歴について簡単に振り返っておこう。日本植民地時代、台南の裕福な名家の長男として生をうける。1932年に末広公学校に入学し<sup>7)</sup>、1938年に台南州立二中へ進学する。学生時代は日本や世界の文学作品を幅広く渉猟し、日本の書物を通して文学的教養を得る。やがて、文学好きが高じて自ら創作を始め、中学三年生の時に『台湾文学』に処女作「媽祖祭」を投稿する。卒業後は文芸台湾社の編集助手を一年間務めたのち、郷里に戻って公学校の教師となる。1945年には徴兵され、入営する。そして敗戦を迎えるが、「八歳から二十歳まで、私はもっぱら日本語の書籍を読み、日本語ばかりを話していた(中略)。そのため母語(閩南語——引用者注)の会話力は著しく低下し、ごく簡単な日常会話だけ話すことができた<sup>8)</sup>」と、彼自身が回想するように、日常会話以外、彼の言語生活はすべて日本語によるものであった。

戦後、文学創作の歩みは言語のハンディキャップを克服することから始まった。中国語の学習に励み、1947年に新聞の文芸欄に中国語の小説や随筆を発表し始める。だが創作言語を切り換えたのちも、つとめて戦後の日本文学界の動向や作品を把握し、また、翻訳にも従事しており<sup>9)</sup>、自主的に旧宗主国の言語である日本語とのつながりを保ち続けていた。生涯にわたり、日本語は母語<sup>10)</sup>に準じる言語であったといえる。さらには、日本に対する理解は、「単に書籍やメディアを通して得たものばかりではない。それらは私の人生の一部を織りなし、血肉にもなっている<sup>11)</sup>」とも述べている。日本経験はいうなれば地下水脈化されていき、自らの人生を一貫したもものとして認識するうえで欠かせない要素であろう。また、自身のアイデンティティと日本に対する思いを次のように語っている。

私の国家は台湾だが、精神のよりどころは日本であり、心の故郷は日本である。しかし、それは私が日本人だということを意味するのではない。私が受けてきた教育、読んだ本、学んだ芸術、すべては日本を通して獲得したので、ゆえに精神面や思想面は日本人によって与えられたとってよいだろう。心の故郷は日本であるということは、日本が好きだという意味でもない。日本からは多くのものを得ることができたので感謝しているが、(中略)だが私の国家は台湾であり、これはまぎれもない事実である。<sup>12)</sup>

心の故郷は日本であっても、日本人ではない——彼のアイデンティティは重層性を含有している一方、「日本を通して獲得した」精神世界を自ら主体的に構築したゆえ、文学創作の源泉をさらに豊かにする契機を得たのではないだろうか。葉石濤の思想の変遷を論じた陳建忠は、葉を「二つの故郷(a double home)を有する持ち主」と指摘しているが<sup>13)</sup>、確かに首肯できる見解である。台湾の複雑な歴史は、そのまま個人のアイデンティティ形成に影響を与えている<sup>14)</sup>。葉石濤は二つの言語、二つの文化を内部に抱える作家だといえるだろう。次節では作品の具体的な検討に入る。

## 3. 回想の彼方にある「日本」

まず「獄中記」のあらすじをみておこう。時代背景は日本統治期から敗戦直後に設定されている。主人公は台湾人のエリート青年・李淳であり、彼の父親は日本兵が起こした不慮の事故によって命を落とし、李淳は幼くして両親を亡くす。地方の名士の林賓に引き取られ、東京帝国大学医学部を卒業する。ほどなく相思相愛であった林賓の娘・銀娥に日本人との縁談が持ち上がる。最愛の人たちを奪われた李淳は復讐を誓い、1939年にアモイに渡って抗日組織の工作員となるが、1944年に逮捕されてしまう。

物語の幕開けは囚われの身となり、台湾に押送され、「牢獄につながれている現在」から始まる。四畳ほどの

独房で、「李淳は日がな一日じめじめとしたタタミのうえ<sup>15)</sup>」に座り、長期にわたる栄養失調により、心身ともに極度に衰弱していた。悲しみと憂いに蝕まれていた彼は、「辛うじて息をしている屍そのものであり、彩られた過去を引きずる亡霊<sup>16)</sup>」のごとく生きながらえている。唯一、独房から出ることが許されるのは尋問を受ける時だが、この日も検事室に入るやいなや、恐怖のあまり失禁をしてしまう。「生ぬるい尿は太ももをつたってぼたぼたと足首まで濡らし、絶望<sup>17)</sup>」で心が折れんばかりであった。

そんな彼を待っていたのは新しく赴任してきた検事で、「顔の輪郭は近衛文麿に似ており、典型的な日本貴族の顔立ちだ。(中略) すらりとした長身にイギリス製のスーツを身にまとい、黄色の水玉模様のネクタイ<sup>18)</sup>」をし、紳士的な振舞いはその家柄のよさを物語っている。その検事とは、東京帝国大学の同窓の菊池薫であり、かつてふたりは懇意な間柄であった。李淳の思い出を呼び起こそうと、菊池は懐かしさに満ちた声で語り出す。(引用文の下線部は筆者によるもの)

①李君、どうやら私のことを忘れてしまったようだね。菊池薫です。ま、無理もないか。君と別れてから七年も経ってしまったからな。(中略) 思い出したかい？ ぼくたちは不忍池の柳の下で手を携えて春を訪ね、浅草の三文劇場でぶらぶらして、午後も夜も楽しい時間を過ごしたよね……。東京のすべては素晴らしかったな！<sup>19)</sup>

②我々は同じく赤門で教育を受けたもの同士じゃないか。君の悪行のせいで、我らの赤門の輝かしい伝統を汚して欲しくないんだ……。<sup>20)</sup>

だが、菊池が懐かしんでいるのは、東京なのか、それとも二人でともに過ごした時間だったのか、李淳には見当がつかなかった。なぜ、エリートの道を歩んだ君が国家を裏切るのかと詰問する菊池に対し、「国を裏切るとは？ 私はどの『国家』を裏切ったというのか<sup>21)</sup>」と言い返ししながら、李淳もまた往時の思い出が脳裏に浮かんだ。

③李淳から恐怖が遠ざかっていく。この部屋の静けさは彼の錯覚を引き起こしてしまった。まるで自分はまだ自由を失っておらず、濃厚でかぐわしいコーヒーの香りがただよう東京の「青い鳥」喫茶店の一角で、気心の知れた友としゃべり続けているかのようだ。<sup>22)</sup>

④この夏に台湾へ帰ろうと決めた時に、李淳は桜が咲き誇る隅田川へ行き、こっそりと日本に別れを告げた。三月のうららかな春の午後、花見を楽しむ人々の群れの中から、なにやら彼の心の琴線を震わすようなメロディーが聞こえてきた。<sup>23)</sup>

とりわけ、注目したいのは情景描写に関する部分である。李淳が現在いるのは「独房」や取調べを受ける「検事室」といった、外界との接触を閉ざされた絶望感だらけの牢獄である。他方、思い出として語られている「日本」はどうだろうか。二人がよき友であったころ、春の楽しいひと時を過ごした「不忍池や浅草の三文劇場」。ともに学んだ「輝かしい伝統」を持つ母校——東京帝国大学。また、「東京の『青い鳥』喫茶店」は、李淳に目の前の恐怖や不安をしばし忘れさせるほど、くつろぎに満ちた場所として描かれている。隅田川で見た桜は美しいメロディーとともに思い出される。記憶の語り手として、①や②は菊池、③や④は李淳であるが、どれもネガティブなイメージを伴わない。そして、想起されるそれらには、すべて日本の地名や固有名詞などの「場所」が含まれている。記憶を取めたものとしての「場所」をどのように解釈できるのだろうか。

ここで、「場所」の概念について確認しておくこととする。日常言語においては、「場所(place)」と「空間(space)」は混用されがちであるが<sup>24)</sup>、人文地理学者として知られるイーファー・トゥアン(Yi-Fu Tuan)はつぎのように述べている。「場所すなわち安全性であり、空間すなわち自由性である」とし、「われわれがそこをよく知り、意味を与えたとき、空間が場所になる」と定義した<sup>25)</sup>。すなわち、「場所」が成立するための必要条件として、「物理的な空間は意味を与えられて場所となる」ということである<sup>26)</sup>。また、人間と「場所」のつながりについて、場所はある種の休止を意味し、人間の逃避の対象にもなりうると指摘している<sup>27)</sup>。



では、作中において、これらの「場所」はどのような意味を生成し、いかなる役割を有しているのだろうか。「不忍池」や「浅草の三文劇場」、「赤門」、「東京の『青い鳥』喫茶店」、「隅田川」——思い出の舞台であり、在りし日の生活や友情を喚起させてくれる「場所」だといえる。そして、記憶を語るうえで欠かせない「場所」であると同時に、感情移入ができる「場所」でもある。それゆえに、それぞれ個人的意味を付与されているとみなすことができるだろう。加えて、これらの特定の「場所」は、ふたりの心理的、情動的なつながりを示す役割をも果たしている。

どちらにとっても「場所」——意味づけられた空間、という点においては同じだが、しかし両者が語る「場所」に付加されている意味に違いがみられる。李淳の場合、自身が訪れた「場所」だけを想起し、そこはかたなくノスタルジヤな色彩を帯びている。端的にいえば、青春のひと時を過ごした留学先を懐かしむ追憶とよぶべきものであろう。他方、菊池が語るのは二人が共有している記憶に介在する「場所」である。そのうえ李淳に語りかけるように話すのだが、なぜ菊池はそうするのだろうか。思い出のなかに存在する「日本」を呼び起こし、すなわち観念上、海を隔てた日本へと回帰することによって、李淳に日本人としてのナショナルアイデンティティを惹き起こせようとする意図を抱いているからではないだろうか。

また、菊池は思い出を話し終えるやいなや、再三にわたって、「天皇陛下の御心は内地人や台湾人、朝鮮人あるいは満州人の区別はなく、みな分け隔てず一視同仁でいらっしゃる。それなのに君は陛下の慈悲深く、尊い御心を裏切ってしまった<sup>28)</sup>」と、李淳を激しく責め立てる。双方には「場所の記憶」という共通点はあるものの、菊池が語るその先には天皇制があり、しかし李淳にはないのだ。語り手である主体の意識の相違がクローズアップされた部分である。すなわち、両者が帝国日本に抱く従属意識の違いを示唆しているのではなかろうか。そして、ふたりの意識の交錯は、支配者・被植民者とラベリングされた彼らの隔たりをより鮮明に呈する。

本節では、イーファー・トゥアンの措定した「場所」理論を援用しつつ、文中に登場した日本の「場所」の叙述について整理した。記憶のまにまに想起される幾つかの「日本」の情景は、「牢獄」とは対照的であり、楽しさや安らぎなどの感情が溢れる「場所」として描かれている。また、主人公ら登場人物の心理的、情動的なつながりと連動する機能を有するものである。総じて「場所」は、二人の記憶を再現する装置として作用することがみとれるが、両者における「場所」の意味づけには差異があるようだ。李淳にとっては、私的な記憶に属する「場所」であり、個人的な意味合いが強い。それに対し、菊池の場合は、天皇制にも言及しているため、彼の語る「場所」にはナショナルアイデンティティの含意があると推認できるのではないだろうか。

#### 4. 主人公の心に響く「日本」

前節では、主人公らの記憶のなかにある日本の「場所」に焦点をあて、その意味づけと機能について論じた。「場所」は「日本」であることが強く意識化されたものとして描かれている、という理解に収斂できるだろう。

ところで、人の記憶は顕在記憶 (explicit memory) と潜在記憶 (implicit memory) に大別できる。顕在記憶とは、たとえば自分が昔、どこで何をして、その時どのように感じたかといった思い出のように、想起意識を伴うものである。他方、潜在記憶は意図せずに思い出し、いわば意識的な想起を伴わない記憶をさす<sup>29)</sup>。上述の「場所の記憶」は顕在記憶に分類できるが、作中立ち上がってくる記憶はそればかりではない。ある時、主人公は偶然『万葉集』の和歌を耳にし、思いがけず自身の潜在記憶に存在する「日本」を呼び起こしてしまう。換言すれば、意図して思い出したものではないが、和歌は彼の内側にある「日本」との結びつきを示すトリガーとなる。本節では一首の古典和歌を手がかりに、主人公の精神性や人物像に接近すべく試みたい。

隣室から朗々と和歌をそらんずる声が聞こえ、(中略) 李淳は思わず耳をそばだてて聞き入ってしまう。

それは日本の古典和歌集『万葉集』に収録されている、額田王作の恋歌「防人の歌」であった。

君が行く道のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも

人生のみじめさと寄る辺なさ、そして、いかんともしがたい思慕がすべてこの短歌に凝縮している。その悲しみや憂いは李淳の心を締めつけていた。<sup>30)</sup>

文中、引用されている短歌は、「額田王作の恋歌「防人の歌」」とあるが、正しくは『万葉集』巻第15(3724)に収録されている「中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子との贈答の歌」である<sup>31)</sup>。また、作者は狭野弟上娘子であり、別れを前にして、心のうちのやるせなさや悲しみを詠まれたものである。

主人公の内面世界を考える前に、まず日本統治期における国語(日本語)教育と日本語短詩文芸との関係について説明する必要がある。台湾総督府は植民化初期の段階においてまず漢詩により、次の段階では短歌や俳句により日本人と台湾人の融和を導きだそうとした<sup>32)</sup>。磯田一雄によると、当時、台湾人が俳句や短歌に接したのは、主として旧制中学校や高等女学校などの国語教育を通じて習得したとされる。とりわけ、中等国語教育の果たした役割は大きいという。また、植民地教育において俳句よりも短歌の方が重視されていたようだ。「敷島の道」といわれるような「日本精神」を植えつけるには短歌がふさわしいと思われており、短歌による皇民化教育が行われていたと指摘している<sup>33)</sup>。こうして日本語短詩文芸は台湾で受容されることとなるが、「それは言語だけではなく、日本的な『ライフスタイル』や『態度』あるいは『価値』に深くかかわるものであり、単に日本語が上達したというだけに留まるものではない」とも述べている<sup>34)</sup>。

主人公はかような時代背景のもとで教育をうけ、また日本への留学経験を持つエリートであり、おそらく日本古典文学に関する素養のある持ち主であろう。日本のいにしえ人が詠んだ一首の和歌が彼の心の奥に分け入り、「胸を締めつけ」られるほどの感動を覚える、というくぐりには理解できよう。だがここで留意したいのは、李淳は古典和歌に深く共鳴する一方、その言動は反日的であることだ。愛する銀娥が日本人に嫁がされると聞き、李淳はスパイとなる決意をする。

「運命とは残酷だ。最初は父さんが日本人によって殺され、今度は君までも奪われてしまうのか。だが、私は決して屈しない。生きている限り必ず戦い続ける……。人生の支えとなるすべてをみすみす奪われてたまるものか！」李淳は天を仰いで、涙を飲み込んだ。<sup>35)</sup>

また、李淳は尋問する菊池に疑問を突きつける。「私はあなたがたの神話教育をうけて育ったが、まさか君は『古事記』に書かれているあの真っ赤な嘘を信じているのか？日本人のエリートである君の理性はいったいどこへ行ってしまったんだ<sup>36)</sup>」。日本ナショナリズムやイデオロギーを批判的に問いかけ、被殖民者でありながらも支配者に屈服しない精神を持つ人物として描写されている。だが、一方では抵抗の拠りどころとして支配者の「近代」言説に依拠するほかはなく、植民地知識人の限界が見え隠れしているのではないだろうか。

松永正義は台湾の世代を生年によって区分し、日本時代以来の世代を八つに分類している<sup>37)</sup>。主人公の李淳は1910年生まれと設定されているが、松永によれば、1905年～1920年生まれは「抗日の世代」であり、その特徴は次のとおりである。

- ①日本の支配体制は確立したものとして感じられるが、物心ついたころから中国は「中華民国」であり、そのナショナリズムの影響も受けている。
- ②知識人は近代教育を受けており、日本語のリテラシーがある。また漢文教育を受けている場合が多く、中国語リテラシーもある場合が多い。
- ③中国ナショナリズムと内部化した「日本」との間にある。

むろん、この見解がすべてあてはまるとはいえないが、大変興味深い指摘である。とりわけ、③は李淳の人物像を解釈しているかのようだ。民族意識と抵抗心が強まり、復讐心に燃える主人公は、「もしも台湾が日本人の植民地でなければ、もしも強大な力で歴史を変えて、再び中国人となることのできるのなら、あまたの苦難は解決されるだろう<sup>38)</sup>」と、中国ナショナリズムを抱く。しかしながら、他方では和歌に感動するように、徹頭徹尾日本を排斥しているわけではない。内面では、日本古典文学の世界に接合されるもうひとりの自分が存在し、和歌という媒介を通じて「日本」と感情的な結びつきを持つ。繰り返すが、抗日組織の工作人員である主人公は、覚醒する民族意識の高まりとともに増幅する日本への憎しみを宿しながらも、ゆくりなく耳にした一首の和歌に共鳴する感受性を具有する。相反する感情が共存し、きわめてアンビバレントな人物であるといえよう。

本節では、主人公の潜在記憶に注視し、『万葉集』という日本表象を通して、その精神性及び人物像についてみてきたが、燃えたる日本への復讐心を持つ反面、古典和歌に聞き入り、心を強く揺さぶられるという描写から、多層的な屈折を内包した人物であることが明らかとなった。おそらく彼の感性は、日本統治期に受けた教育とは不可分な関係にあり、作中に和歌を引用することによって、その日本的感性を秘める内面世界をきわたらせている。また、台湾知識人の文化の「日本人化」を垣間みることができたのではないだろうか。

## 5. 集団記憶・個人記憶に存在する「日本」

最後にエピローグをみておこう。やがて、終戦をむかえ菊池は切腹自殺をする。世を去る直前に、彼は人質として拘束していた銀娥を釈放する。尋問中には激しく罵りあう二人だったが、李淳は菊池の死を心から悼んだ。

菊池よ、なぜ君は死を選んだのか。死をもって償うべき人はほかにも大勢いるのに、彼らは再び復活して歴史の舞台に舞い戻ってくることだろう。恥知らずの輩どもだ。君は其中で最も人間性を失っていない一人であり、君の罪はいたって軽く、死ぬ理由などないのに死んでしまった。それは君が明晰な理性を持ち続けていることの証である。君こそが最も秀でた日本人だ！（中略）戦のたえない時代では、あらゆる基準や価値観はことごとく変容を遂げてしまうものだった。<sup>39)</sup>

また、菊池は日本社会の犠牲者であるとし、「歴史という名の巨大な車輪は菊池男爵の細い体を轆き、あたかも牛車の重い車輪が李淳の父親のがっちりとした体を轆いてしまった時と同じように<sup>40)</sup>」と、哀切な思いにかられる。先述のごとく、主人公は強い復讐心を抱く抗日工作員として描かれている。だが、李淳は自ら命を絶った菊池に対し憎悪ではなく、むしろ悲しみや同情、賞賛などの感情をあらわにしている。かつて青春時代をともに過ごしたよき友であったにせよ、工作員という設定とは矛盾するかのような感情描写が随所にみられる。断罪するのではなく、菊池もまた父親と同じく戦争の犠牲者であるという視点は何を意味するのだろうか。植民地支配のなかでの人々の関係は、支配者と被統治者という二項対立的な構図では捉えきれない側面があると示唆しているのではあるまいか。

ここまでみてきたように、「獄中記」は日本統治期に抗日組織の工作員となった台湾人青年の物語である。それは同時に台湾の歴史記憶の一部を再現したものでもある。実際、文中には「皇軍」、「大東亜共栄圏」、「特高警察」、「皇民化運動」、「万世一系系天皇」など、植民地時代を想起させる語彙がちりばめられている。だがそればかりでなく、作中に表象されている「日本」は、往年の思い出を喚起する場所や主人公に深い感動を与える和歌も含まれている。そして、エンディングで主人公が吐露した思いからもわかるように、両面的な感情や観点が述べられた作品である。繰り返しとなるが、本作は台湾の近代史の一部であった日本植民地時代の集団記憶だけでなく、作家自身が受容したであろう個人記憶をも包含している。それらを縦糸にし、時代の流れに絡ませ、この作品を紡いだ。描出されている「日本」は輻輳的なものであり、単純に「支配への抵抗」、あるいは「日本文化への愛着」と等号で結ぶことはできないだろう。なぜなら、重層性を帯びた歴史が物語の背景をなし底流として伏在しているからだ。

## 6. おわりに

本論の主たる関心は、「獄中記」に表象されている「日本」について明らかにすることであり、文中に登場する「日本の場所」と「古典和歌」を手がかりとした。両者はいずれも登場人物らの記憶にまつわるものだが、「場所」は意図的に想起する顕在記憶であるに対し、他方、「古典和歌」は想起意識を伴わない潜在記憶に属するものである。具体的な地名や固有名詞を織りまぜて描かれた「日本の場所」は、作中人物の心理的、情動的なつながりを示す働きを有する。また、「場所」には個人的な意味を付与された空間である以外に、ナショナルアイデンティティの含意を帯びるのではないかと推論した。

次に、『万葉集』の和歌に深く共感する主人公の精神性について考えると、抗日組織のスパイという設定に反



するかのように、古典和歌に対して感情的な結びつきがみられ、日本的な感性を内に秘める人物だということが明らかとなった。作中に和歌を引用することで、主人公のアンビバレントな特徴を浮かび上がらせている。物語のなかで述べられている日本表象によって、植民地時代の歴史記憶が重層的に可視化された。

付言するものとして、政治的な文脈から少し考えてみることにしたい。六十年代の台湾では国民党政権による一党独裁政治が続き、一元的な言語政策が施行されていた<sup>41)</sup>。また、「中国化」教育で日本への思いは「皇民化意識」として克服すべき対象であるため、日本統治期を歴史の負の遺産として一掃しようとした時期でもある<sup>42)</sup>。自明のことながら、「日本」を直接的に表現するには制約が伴う。にもかかわらず、なぜ葉石濤は「日本」を両義的に描いた「獄中記」を発表したのだろうか。

文学評論家としても高名な葉は<sup>43)</sup>、六十年代のモダニスト作品について、「台湾の現実社会とはかけ離れた根無し文学である<sup>44)</sup>」と評している。また、「土地なくしては、文学はな<sup>45)</sup>」く、「歴史的記憶を忘れ去った文学は人々の声を反映できない<sup>46)</sup>」ため、「台湾の郷土文学は歴史的事実に根ざすべきだ<sup>47)</sup>」と指摘している。そのうえ、作家は社会の現実から目を背けてはならないという信念を持ち続けていた<sup>48)</sup>。葉には台湾の歴史や現実を描きたい、描くべきだという意識があったと推察する。ゆえに作品に「日本」を登場させ、複雑な自身の、そして台湾の「日本」経験を描くと同時に、自らの創作論を実践したものと思われる。

やがて七十年代に入ると、台湾文学界では芸術至上主義的な文学への批判が起き、現実主義文学の称揚が声高に叫ばれる。六十年代のモダニズムを受容した後は、台湾の現実を訴え、写実的なリアリズムを追い求める郷土文学の全盛期が到来する。したがって、「獄中記」は台湾の過去を叙述しながらも、七十年代の郷土文学<sup>49)</sup>のきざしを内包し、それ以前と以後をつなぐ作品であると位置づけができるのではないだろうか。この点については、稿を改めて検討したい。

## 【註】

- 1). 黄意雯「台湾作品に見る日本語借用現象の量的推移」、『計量国語学会』第28巻5号、2012年、168頁
- 2). 陳芳明著、下村作次郎、野間信幸、三木直大、垂水千恵、池上貞子訳『台湾新文学史上巻』東方書店、2015年、265頁
- 3). 彭瑞金『植民地経験と台湾文学』遠流出版、2000年、195-281頁
- 4). 葉石濤「獄中記」。本稿で使用するテキストは、彭瑞金編『葉石濤全集1 小説巻一』高雄市政府文化局・国立台湾文学館、2008年、293-335頁に拠る。また、日本語訳はすべて筆者によるものである。
- 5). 鄭清文「葉老未老」、『文学台湾』第50期、2004年、38頁
- 6). 彭瑞金「鍾肇政と葉石濤の植民地経験小説比較」、『驅除迷雾找回祖靈 台湾文学論文集』春暉出版、2000年、292頁
- 7). 日本統治期の初等教育において、台湾に移住した日本人が小学校、漢民族・行政区域内原住民が公学校に入学すると定められていた。詳しくは簡月真『台湾に渡った日本語の現在—リンガフランカとしての姿—』明治書院、2011年、13-19頁を参照されたい。
- 8). 葉石濤「我與《紅樓夢》」台湾日報、1977年8月24日
- 9). 文学作品や学術論文のみならず、多岐にわたるジャンルの翻訳を手がけ、前掲書『葉石濤全集21 翻譯巻一』～『葉石濤全集23 翻譯／資料巻三』を参照されたい。
- 10). 織世万里江は「母語」について次のように定義している。「ある個人が幼少時に習得した言語で、かつ高度な運用能力を持つ言語とし、その数は一つだけの場合と複数ある場合がある。母語は必ずしも人生の中で最初に接触した言語とは限らず、また常にもっとも運用能力が高い言語とは限らない」。本稿もこの定義に従う。織世万里江「リーガルエイリアン」、郭南燕編『バイリンガルな日本語文学』三元社、2013年、356頁
- 11). 葉石濤「東京物語」自立晩報、1992年1月27日
- 12). 莊紫蓉「自己和自己格闘的寂寞作家：專訪葉石濤」、彭瑞金編『台湾現当代作家研究資料纂編15 葉石濤』国立台湾文学館、2011年、309-310頁
- 13). 陳建忠「從皇國少年到左傾青年 戦後初期葉石濤の小説創作と思想転折」、『被呪咒の文学：戦後初期台湾文学論集』五南図書出版、2007年、87頁
- 14). 三須祐介「漂泊するアイデンティティと台湾の文化—台湾で考えたこと、台湾を考えるとということ—」、『広島経済大学研究論集』第34巻第2号、2011年、103頁
- 15). 「獄中記」、前掲書『葉石濤全集1 小説巻一』、294頁
- 16). 同上書、293頁
- 17). 同上書、297頁

- 18). 同上書、298-299頁
- 19). 同上書、299頁
- 20). 同上書、327頁
- 21). 同上書、302頁
- 22). 同上
- 23). 同上書、317頁
- 24). 陳培豊「植民地体制下の台湾の民謡——民謡に見る「場所」と「空間」、所澤潤、林初梅編『台湾のなかの日本記憶』三元社、2016年、76頁
- 25). イーフー・トゥアン著、山本浩訳『空間の経験』ちくま学芸文庫、1993年、11頁
- 26). 大谷華「場所と個人の情動的なつながり—場所愛着、場所アイデンティティ、場所感覚—」、『環境心理学』第1巻第1号、2013年、58頁
- 27). 松田純子「イーフー・トゥアンの「場所」理論について」、『文化女子大学紀要。服装学・生活造形学研究30』、1999年、146頁
- 28). 前掲書『葉石濤全集1 小説巻一』、304頁
- 29). 詳しくは、今井久登「潜在記憶研究における想起意識の位置づけとその変遷」、『研究年報』第60号、2013年、177-189頁。鈴木宏昭「教養としての認知科学」東京大学出版会、2016年、65-103頁を参照されたい。
- 30). 前掲書『葉石濤全集1 小説巻一』、311-312頁
- 31). 高木市之助、五味智英、大野晋校注『日本古典文学大系 萬葉集四』岩波書店、1962年、97頁。口語訳は次のとおりである。「あなたのいらっしゃる長い長い道を手繰って折りたたんで、焼き尽くしてしまいたい。その天の火がほしいことよ」。市古貞次、小田切進編『日本の文学古典編 万葉集三』ほるぷ出版、1987年、97-99頁参照。
- 32). 陳培豊「日治時期的漢詩文、国民性と皇民文学——在流通与切断過程中走向純正帰——」、『跨領域的台湾文学研究學術研討會論文集』国立台湾文学館、2006年。後掲磯田論文、80頁より転載。
- 33). 磯田一雄「戦後台湾俳句小史（一） 戦前期台湾の国語教育と俳句・短歌——生活表現の「日本化」・「近代化」」、『成城文藝』第239号、2017年、77頁及び84頁
- 34). 前掲磯田論文、73頁
- 35). 前掲書『葉石濤全集1 小説巻一』、320頁
- 36). 同上書、328頁
- 37). 松永正義「戦後台湾における日本語と日本イメージ」、前掲書『台湾のなかの日本記憶』、57頁-60頁。①には全体的特徴を、②には教育の状況を、③にはその日本イメージがどのようなものであるかを示した。なお、「日本時代に書かれたことは、知識人に限定して考えられるべき」とのことである。また、生まれ年の上限と下限は厳密に決めておらず、便宜的なものであるにすぎない、としている。
- 38). 前掲書『葉石濤全集1 小説巻一』、322頁
- 39). 同上書、334頁
- 40). 同上書、335頁
- 41). 中川仁『戦後台湾の言語政策—北京語同化政策と多言語主義』東方書店、2009年、13頁
- 42). 野嶋剛『台湾とは何か』筑摩書房、2016年、75頁
- 43). 葉石濤『台湾文学史綱』文学界、1987年。台湾文学史観を構築したことに多大な意義があると高く評価され、台湾文学史の基本的文献である。また、ほかにも多数の文学評論を発表しており、詳しくは、前掲書『葉石濤全集13 評論巻一』～『葉石濤全集19 評論巻七』を参照されたい。
- 44). 前掲書『台湾文学史綱』、114頁
- 45). 葉石濤「没有土地、哪有文學？」、前掲書『葉石濤全集7 隨筆巻二』、22頁
- 46). 前掲書『台湾文學史綱』、142頁
- 47). 同上
- 48). 趙慶華「老朽的年代、不褪色的青春夢 永遠的『文学青年』葉石濤」、『新觀念』第150集、2001年、116頁
- 49). 詳しくは、中島利郎、河原功、下村作次郎編『台湾近現代文学史』研文出版、2014年、277-303頁を参照されたい。